

スコットランドにおけるバラッド文化の展開

——スコティッシュ・アイデンティティ探求の諸相——

中島久代

要約

This paper discusses inheritance and development of ballads in Scotland through examining Scottish ballad collections, border ballads, and the works of Burns, Scott, Leyden, Hogg, Davidson, and Lochhead. The points of the examination are how Scottish narrative poems have been preserved, what roles Scottish ballad collections have played, what aspects of ballads have influenced Scottish poets, and what meaning their works have gained. Scottish poets have inherited the ballad tradition by modifying, criticizing, and diversifying their forerunners' works. Not obsessively clinging to the tradition, but observing it critically has been central to the preservation of Scottish ballads.

Keywords : 伝承バラッド, ボーダー・バラッド, バラッド詩, スコットランド詩
スコティッシュ・アイデンティティ

1. 伝承バラッド・ブロードサイドバラッド・バラッド詩

James Alison は *Scottish Literature: In English and Scots* (2002) 中のバラッドの章を始めるにあたり、「スコットランドは伝承バラッドという偉大な財産を持っている」と書き出している(67)。もちろん、伝承バラッドは唯一スコットランドで発生し継承された文化ではない。このことは伝承バラッドのコレクションのキャノンとなった F. J. Child 編纂の *The English and Scottish Popular Ballads* (1882-98) において、チャイルドが 305 篇の多くのバラッドについて、ヨーロッパ中にある類似のモチーフとストーリーを丹念に解説していることから明らかである。しかし、バラッドが文学史上の「偉大な財産」と表現されるのは、バラッドがスコットランドとその文学の展開に独自の貢献を果たしたことを示唆しているからである。本稿では、スコットランドを舞台にして、どのようなバラッドがうたわれたか、バラッドコレクションはどのような役割を担ったか、テキストとなった口承伝承にスコットランドの文人たちはどのような影響を受けたか、そして文人たちのバラッド詩はスコットランドにおいてはどのように展開し、何を表現してきたかを、筆者がカバーしうる範囲で点描し、スコットランドにおけるバラッド文化の展開とその意味を検討する。本文中の伝承バラッド作品の言及において、作品名後ろの番号はチャイルドによる分類番号と版を示し、翻訳は『チャイルド・バラッド』全3巻によっている。

まず、伝承バラッド (Traditional Ballads) とは何かを押さえておく。伝承バラッドは、中世以来ヨーロッパ各地で、職業詩人によってではなく、民衆によってうたい継がれてきた物語詩を指す。語りであり、詩であり、旋律に合わせてうたわれる場合が多く、ダンスが付随するものもあり、民衆文化の一事象である。中世が起源であるが、伝承バラッドの多くは素朴なスタンザ構成と韻律でうたわれ、また、個人の感情に限った世界ではなく、どの場所にもどの世代にもその歌を受容する者によって普遍化しうる非個人の物語であるため、口承伝承の時代を経て、印刷文化の発展によって口承がテキスト化された時代以降も、2つの方向へとスコットランドを含めたイギリスの文化文芸現象を牽引することとなった。

その一つは、ブロードサイド・バラッドの展開である。Freidman の *Ballad Revival* (1961) の第2章 (35-63) および Shepard の *The Broadside Ballad* (1962) 第1章 (23-30) と第3章 (47-65) を参考にまとめると、読者層の拡大に伴いブロードサイドまたはブロードシートという初期の印刷メディアが誕生し、そのための掲載記事として膨大な量のブロードサイド・バラッドが創作され、バラッドは民衆生活に広く浸透した。ただし、ブロードシートに掲載された時事ニュースや事件はバラッド形式のみでうたわれたのではなく、バラッド形式ではない記事もブロードサイド・バラッドと呼ばれた。それらは、社会のニュースや話題を題材として創作されたものの他、古い伝承バラッドに加筆した歌が印刷流布される場合もあった。伝承バラッドとして後世の編集集に再録されたバラッドには、純粋な口承伝承に限らず、ロビン・フッド・バラッド群のようにブロードサイド・バラッドが口承化した歌もあり、口承伝承とブロードサイドは区別を曖昧にして、バラッド文化を形成していった。

もう一つは、バラッドの伝播が文壇の詩人たちに作品創作のインスピレーションを与え、バラッド・リバイバルの機運をもたらしたことである。Thomas Percy 編集の *Reliques of Ancient English Poetry* (1765) はイングランドとスコットランドの文学史に登場するロマン派以降の詩人たちに決定的な影響を与え、Burns, Scott, Coleridge, Shelley, Wordsworth, Keats, Tennyson, Rossetti 他、有名無名の詩人たちが、伝承バラッドの形式、テーマ、エートスを模倣したバラッド詩 (Literary Ballads) を残し、バラッド詩の系譜と呼ぶ大量の作品群が存在している。筆者を含むバラッド研究会によってまとめたデータベース *The English Literary Ballad Archive* (2010 データ部分完成) には、18世紀から20世紀までの141人の詩人たちの作品748篇を掲載しているが、その中で19世紀はバラッド詩の最盛期であり、約60人の詩人たちが400篇以上の作品を創作しており、技巧においてもテーマにおいても伝承バラッドの素朴な模倣を脱して独自性を獲得し、バラッド詩の黄金時代が築かれた。バラッドはイングランドとスコットランドの民衆文化においても文壇においても、それぞれの基盤の一つとなっていることに疑いはない。

2. バラッドコレクションとアイデンティティの主張

パースィの *Reliques* が引き起こした18世紀のバラッド・リバイバルとバラッド詩の系譜の形成を上述べたが、この編集集の果たした役割は文学というジャンルに関してのみではなかったようだ。Groom は “The purest english’: Ballads and the English Literary Dialect” (2006) にお

いて、パーシィが *Reliques* 編纂によって 'Englishness' としてのアイデンティティ確立を試みたことを指摘している。Colley の *Britons: Forging the Nation 1707-1837* (1992) によれば、Great Britain と称する国は 1707 年のスコットランドとの議会合同以降の 18 世紀に出現した、一つの概念であり創られたネーションであるため、イギリスという国としてのアイデンティティの確立を必要としていた。パーシィが同時代のバラッド詩人 William Shenstone に送った 1761 年の書簡には、*Reliques* 編纂を開始した時、彼がスコットランド、ウェールズ、アイルランド、西インド諸島にそれぞれ情報提供者を見い出そうとしていたことが記述されており (*Percy Letters* 7: 108-110)、そのことは大英帝国の全区域を文学上の遺産を保存するこのプロジェクトに巻き込むという目的のためであり、つまり、バラッドコレクションの編纂によって、パーシィは当時のブリテン諸島の人人に必要な新たなアイデンティティを創作することを狙っていたと言う (Groom 181)。また、グルームは、Anderson が *Imagined Communities* (1983) で言うところの、近代のネーションは「共有されるイメージで繋がった、想像される共同体」であるという定義 (6) も援用して、*Reliques* は想像上でなされる国家創造の萌芽であったとも言う (181)。しかも、パーシィは蒐集された作品に加筆修正を自由に施した。このことによって、口承の世界の名残としてテキストに響いていた多様な音と雑音は消し去られ、お上品で文字の読み書きができる階層の目印となる、懐古調に満ちた強い重低音を響かせるテキストとなり、結果としてパーシィは *Reliques* によって 'Englishness' のアイデンティティ確立を追求した (194) と結論付けている。

他方、スコットランドのバラッドやソングのコレクションの編集者たちは、スコットランドが 1707 年の議会合同によってそのアイデンティティを喪失する前後から、イングランドの政治文化と相対するナショナル・アイデンティティを表明する役割を一連のコレクションに意図的に担わせてきた。議会合同の前年に刊行が始まった James Watson の *A Choice Collection of Comic and Serious Poems both Ancient and Modern, By Several Hand* (1706-11) は、スコットランドで刊行された初のスコッツ語による詩とバラッドのアンソロジーである。ワトソンは巻頭で次のように読者に呼びかけている。「近隣の王国では種々の詩のコレクションが相次いで刊行されているように、この種のものを我々が持つことは大いに正しいことだ。本書はわれわれの母語のスコッツ語で刊行される第 1 号であり、読者諸氏はその点を寛大にご理解願いたい」(n.pag.)。スコッツ語によるアンソロジーの後には、Allan Ramsay が編纂し、彼自身の作品を含んだスコッツ語と英語のソングとバラッドのコレクションとして、*Tea-Table Miscellany* (1724-37) が刊行された。序文でのラムジーの声明は「スコットランドの旋律には読者諸氏に支持されうる陽気さと自然な甘美さを持っており、だからこそ、祖国だけでなく外でも受容されるのだ」(v) と、愛国的態度を隠さない。続く *The Ever Green: Being a Collection of Scots Poems, Wrote by the Ingenious Before 1600* (1724) でも、ラムジーは「ここに納めた古の詩人たちの作品は彼ら自身の国で創作されたものであり、外から持ち込まれたものではない。イメージも背景も祖国のものなのだ」(vii-viii) と、純粋なスコットランドの創作であることを強調する。David Hard による *Ancient and Modern Scottish Songs, Heroic Ballads, Etc* (1776) で、ハードは英語とスコッツ語の違いを説明し、そのためにスコッツ語の glossary をも整えた。James Johnson が編纂を開始し、バーンズも寄稿者編集者として貢献した *The Scots Musical Museum* (1787-1803) 全 6 巻はジョンソンの祖国の旋律への愛着から生まれた、スコットランドのフォーク・ミュージックのコレ

クションである。その後に *Reliques* の影響下に生まれたスコットの *Minstrelsy of the Scottish Border* (1802-03) が続く。伝承バラッドとスコットランド詩人のバラッドと詩が納められたこのアンソロジーの、それぞれの作品に付けられた詳細な地理的・社会的状況の解説は、スコットの郷土愛を伝えて余りある。ワトソンからスコットまで、これらの編者たちに共通するのは、スコットランドという土地で、その土地のことばと音楽で継承されてきたものを誇り高く提示し、スコットランドのアイデンティティを保持し主張しようとする明快な姿勢である。

19世紀末、それまでの先代コレクターたちの収集から選択する方法でチャイルドがなした伝承バラッドのテキストの集大成 *The English and Scottish Popular Ballads* を経て、現代のスコットランドにおけるバラッド編纂史のトリとして、次の2つに言及しておきたい。1951年設立のエディンバラ大学 School of Scottish Studies を本拠地として Hamish Henderson らが行ったフィールドワークによって、パース、アングス、その他の北東スコットランドで、トラベラーや農民の間で何世代にも渡ってうたい継がれてきた伝統的なソングや伝承バラッドが存在することが広く知られることになった。その膨大な成果の一端が *Scottish Tradition* (1975) 全6巻であり、“The Muckle Sangs”と題された第5巻にはその地でうたい継がれてきたバラッドが納められている。もう一つは、21世紀に完結したフォークソングの編纂集、*Greig-Duncan Folk Song Collection* 全8巻(1980-2002)である。アバディーンの教師 Gavin Greig と牧師の James Duncan がチャイルドの成果に刺激されて1902年に開始した北東スコットランドのフォークソングの蒐集は、Pat Shuldham-Shaw と Emily Lyle に継承されて完成を見た。チャイルドがバラッドとした以外の多くの歌、コレクターの説明書き、旋律の記譜もなされている。シャルダムショーは初代コレクター、グレイグとダンカンの蒐集の経緯を第1巻の‘General Introduction’にまとめ、スコットランドの最大で最良のフォークソングのコレクションであると結んでいる(xiv)。これら現代のコレクションはチャイルド・バラッドを補完し、同時にスコットランドにおけるバラッド継承の事実を伝えている。

3. ボーダー・バラッドの精神

スコットランドとイングランドとの国境ボーダー地方で生まれ、うたい継がれてきたボーダー・バラッドと呼ばれる作品群は、その地域におけるスコットランドとイングランドの複雑な歴史とそれ故の込み入った関係性、そこに暮らす人々の独自の生活と精神を際立って濃厚に反映したものである。チャイルド・バラッドでも305篇中60篇あまりを占めている。ボーダー・バラッドの舞台の地図を Reed の *The Border Ballad* (1973) に従ってたどれば、1838年の最後の地域紛争の和解によって確定されたスコットランドとイングランドとの境界線は、東の Norham から Cheviot, Redesdale などを経て西の Solway 湾側に位置する ‘Debatable Land’ を結ぶ線である。しかし、ボーダー・バラッドの舞台としてのボーダー地方とは、その線を挟んで、Newcastle, Dumfries, Edinburgh を含んだ区画が相当し、イングランドの Northumberland 近郊の荒野も歌の舞台として含まれると言う(9-17)。この限られた地域でボーダー・バラッドは豊かに展開した。ボーダー・バラッドは、ボーダー地方の社会と生活をほぼ忠実に反映した物語、対イングランド抗争やクランの戦いを記録した歴史物語、ボーダー地方に実在する町・村の有

名人の伝説、と3つの分類が可能である。それぞれの特色を把握するために、代表的なバラッドを紹介する。

ボーダー地方の社会と生活をうたう作品の一つに「カウフィールドのアーチャー」(“Archie o Cawfield” 188B)がある。ティヴィオットデイルを根城にするホール一族が敵方に捕われた兄弟アーチャーを救出するまでの、アクションがふんだんに盛り込まれた痛快劇である。ホール一族は11人の徒党を組んで、牢獄の扉を破って囚人アーチャーを救出しようとするが、彼の足には95キロもの足枷が付けられていた。その重みをものともせず、仲間のひとりジョッキーは足枷もろともアーチャーを背中におぶって助け出す。仲間のディッキーが交替しようと申し出るが、‘he’s no the weight of a poor flee.’ (st. 15, 「小蠅ほどにも重くはない」)と粹な台詞を吐いて奮闘する。アナン川を越える時に追手が迫るが、自慢の馬で嵐にうねる真っ黒な川を渡り切る。川を挟んで、両軍のやりとりはあくまでコミカルである。ホール一族は‘Come through, and drink some wine wi me!’ (st. 26, 「渡って来い 一緒にワインを飲もうじゃないか」)と対岸から追手をからかい、敵は‘Throw me my irons, Dickie!’, ‘I wat they cost me right dear’ (st. 27, 「スペイン鉄は返してくれ とても高価なものなんだ」と荒れる川を挟んで懇願し、修辞学で言うところの急落法(アンチクライマックス)で結末となる。クランと称してはいるものの、実際には貧困にあえぐアウトローたち。しかしその貧困故の厚い人情と、危機をユーモアで乗り越えるタフな精神が、この物語には生き生きとうたわれている。

戦いを記録した歴史物語の一つに、1388年、オッタバーンでの対イングランド戦でのスコットランド軍の勝利をうたった「オッタバーンの戦い」(“The Battle of Otterburn” 161C)がある。このバラッドの史実はこうである。中世のボーダー地方はクランたちが隙あらば他領地を侵略する無秩序地帯だったが、時の英国王と親族との諍いが起こり、この無秩序状態を超えてクランたちが結束し、スコットランドとして蜂起するチャンスを与えた。クランたちは槍兵12,000人、歩兵40,000人を結集して60年ぶりの対イングランド蜂起を画策、しかし、イングランドはいち早く逆襲に転じた。イングランドの目を欺く偽装として、スコットランド軍ダグラス伯ジェイムズは分隊を率いて東のニューカースルからダラムへと進軍した。オッタバーンにこの分隊が野営した情報を掴んだイングランド軍パースィは、わずか槍兵600人、歩兵800人で奇襲攻撃を仕掛け、スコットランドのジェイムズを倒した。大将を失ったスコットランド軍は、それでも、大将の戦死を隠蔽すべく「ダグラス」とその名を連呼して全軍の戦意を高揚し、ついにイングランド軍パースィを捕虜とした。戦いの結末は、イングランド側総捕虜数1,040人、死者1,860人、負傷者1,000人以上。対するスコットランド側は死者100人、捕虜200人、戦いはスコットランドの圧倒的勝利に終わった。しかし、この歴史がバラッドとなった時のクライマックスはスコットランドの勝利ではなく、パースィとダグラスが敵ながら尊敬し合う大将の美学に置かれている。ダグラスの甥モンゴメリーはシダの草むらにダグラスを埋葬し、パースィを捉えて曰く、‘yield thee to the braken-bush, that grows upon yon lilye lee.’ (st. 32, 「百合の花咲く丘の上の シダの草むらに降参するのだ」)とダグラスの死を告げる。気付かぬパースィは、‘I will not yield to a braken-bush,’ ‘But I would yield to Earl Douglas’ (st. 33, 「シダの草むらになど降参せぬわ」「降参するならダグラス卿」と潔い敗北を語る。クランの結束力の強さ、勇敢さ、戦の最中であっても忘れられることのない深い敬意、国と長への忠誠心、そして激しい戦いを簡潔に描写する

テクニックは、この地の複雑な歴史とともに、この地に生きて時の信条を貫いた人々のプライドと独立心を雄弁に物語る。余談だが、チャイルド採録のE版までのうち、*Reliques*に採られたA版はイングランド側の武勇をうたい、*Minstrelsy*に採録のこのC版はスコットランド側の武勇をうたうというコントラストも、バラッドが受容者にとってどのようにでも変化する実態を伝えて興味深い。

ボーダー地方の有名人の伝説をうたう作品の一つに「うたびとトマス」(“Thomas Rymer” 37A)がある。アールストンというボーダー北部の小さな町で暮らしていたトマスが、妖精と出会って予言能力を身に付ける冒険譚である。13世紀頃に当時の地名アーセルドウンに実在した詩人トマスは、羊歯の丘で、全身緑の衣装に身を包んだ美女と出会う。こんな美女は天の女王様にちがいないとトマスはひれ伏して挨拶するが、彼女は妖精の国の女王だった。ミルク色の馬の後ろにトマスを乗せて、妖精の女王は40日間地界をひた駆ける。そして、妖精と出会った日から7年間、トマスはこの世から姿を消した。この間にトマスは予言能力を磨いたというのである。Murryは、現代では誤解を招きやすい予言というものの性質について「予言の言説は現状の権威付けと関わるため、12世紀以降、政治、文化、およびナショナル・アイデンティティと深く結びついた」(320)と解説する。後世トマスは著名な預言者としてスコットランドのアイデンティティの象徴の地位を獲得した。

浦島伝説に似た素朴な物語でありながら、トマスの名と予言能力は、後世の複数の詩人たちの作品においてそれぞれが生きた時代のテーマを示唆するモチーフとなった。スコットは“Thomas the Rhymer”三部作(1802-03)において、うた人トマスが得た圧倒的な予言能力とその偉大な先人の最期の描写に愛国心の高揚を狙った。キーツは“La Belle Dame sans Merci”(1819)において、妖精の女の虜となった騎士を語り手として、終わりのない騎士の苦悶をロマン派的なエクスタシーとして描いた。スコットランド詩人John Davidsonはスコットの“Thomas the Rhymer”の模倣と自ら説明した“Thomas the Rhymer”(1891)において、アレグザンダー三世の死が天変地異の出現によって予言されるというゴシック作品を創作し、スコットからのテーマの逸脱を示した。Rudyard Kiplingは“The Last Rhyme of True Thomas”(1893)において、トマスに爵位を与えようとした王と、逆に真の人間性を王に諭すトマスとを対置して、孤独な哲学者という新しいトマス像を打ち立てた。そして再びスコットランド詩人Edwin Muirは“The Enchanted Knight”(1937)において、キーツが100年以上も前に創作した苦悶する騎士のその後を創作した。長く地中に眠り、鎧は錆び身体は動かず、眠る土の上を踏み行く現代の人々からは完全に忘却され、魅入られた騎士は底なしの孤独を託つ。詩人たちはトマスというモチーフによって、予言能力を持つもののみに許される賞賛を、異界の存在に魅了された人間の終わりのない苦悶を、特殊な能力を持つものの厳しい孤独を、そして、それらが全て忘却される歴史になお生き続けることの苦しみを、描き継いできた。数世紀に渡りイメージが幅広く喚起され継承されたという事実の底にあるのは、トマスは元々実在の人物だったとしても、バラッドの中では特定の感情や意見を表現しない物語の行為者であり、どの場所にもどの世代にもその歌を受容する者によって普遍化しうる非個人として継承されてきたからである。ボーダー地方の人々の物語化によって、トマスは、その狭い地域を超え多様な創作のモチーフとなった。これらの詩人の後には、Ellen Kushnerによる長編ファンタジー小説 *Thomas the Rhymer* (1991)

も出現した。そこでは、過去の詩人たちが描かなかった、異界を見たトマスの人間としてのその後の成長が物語化されている。

リードは、ボーダー・バラッドとは「王位統合の時までの、ボーダー人の喜び、悲しみ、迷信、野蛮さをうたった人間の生活のユニークな記録である」(8) という。そして、そのボーダー・バラッドにうたわれた人々の精神をスコットランド文学の特質として賞賛し、20世紀の文学の感傷性に警鐘を鳴らしたのはミュアである。ミュアは「ボーダー人の精神は英雄的であり詩的であり、その本質的な表現こそはバラッドである。バラッドは中世スコットランド詩人ヘンリソンやダンバーよりもさらに偉大なスコットランド文学の最大の集積である」と断じ (*Scottish Journey* 45-46)、返す刀で宗教改革後の反カトリック的プロテスタント的感傷性を持つとしてバーンズ作品を批判した。

4. バーンズの教訓性

バーンズが生きた18世紀後半は、バラッドコレクションの節で述べたような、スコティッシュ・アイデンティティの回復を標榜してのバラッド蒐集熱が高まった時代である。加えて、バーンズ自身が伝承バラッドをうたい聞くという伝統的な環境の中に育った。家庭で母親と使用人から聞いた様々の伝承や物語によって、郷土に伝わる民衆の物語詩にバーンズは目覚めたという (*Scottish Literature* 75)。バーンズは「天賦の才の農民詩人」(‘heaven-taught ploughman’, *Scottish Literature* 112) というレッテルを与えられた時代もあったが、作品を検証すれば、スコットランドの先人詩人たちからの巧みな模倣が縦横無尽に見られ、「MacDiarmid, Scott と並んで議論の多い詩人」(*Scottish Literature* 146) がその正体なのだ。農民詩人の仮面を持つバーンズの、伝承バラッドの受容の側面を見てみよう。Snyder は ‘Notes on Burns and the Popular Ballads’ 上で、バーンズのソングが伝承バラッドをどのように模倣したのかを分析し、A から C までの分類を行った。分類 A は伝承バラッドを忠実に模倣して語り直している 2 作品、分類 B はリフレインや常套表現などのバラッドの様式が模倣されている 5 作品、分類 C はバラッドの特徴的な表現が 1 箇所でも使われている 12 作品、合計 20 作品をバラッドの模倣とした。この中から「ケリバーン河畔の農夫」(‘The Carle of Kellyburn Braes’ 1794) を取り上げる。

この作品は伝承バラッド「農夫の悪妻」(‘The Farmer’s Curs’t Wife’ 278A) の忠実な模倣である。「農夫の悪妻」では、農夫から悪妻を譲り受けた悪魔が苦勞して悪妻を背中に担いで家に戻ると、悪妻は悪魔の子どもたちを蹴り、頭を殴り、悪魔を壁にぶちあて暴力三昧にふるまう。悪魔は農夫に悪妻を返しに行き、‘I have been a tormentor the whole my life, but I neer was tormented so as with your wife.’ (st. 11, 「今までさんざ 人間を苦しめる役は演じたが おまえさんの女房から苦しめられるほどの役はなかった」) と弱音を漏らすという滑稽な物語である。バーンズの作品でも、ケリバーンの農夫から悪妻を譲り受けた悪魔は、貧乏な行商人よりしく悪妻を家へと運んでいったが、悪妻は気が狂った熊のように 50 人の悪魔の警護隊をひとり残らず殴ってしまう。悪魔はこの悪妻に縛られていたケリバーンの農夫を哀れに思い、しかし悪魔自身の結婚生活も地獄だと気づき、農夫に悪妻を返しに行く。

'I hae been a devil the feck o' my life;
 (Hey, and the rue grows bonnie wi' thyme,)
 But ne'er was in hell, till I met wi' a wife;
 (And the thyme it is wither'd, and rue is in prime.) (st. 14)

最終第14スタンザで「おれは生涯悪魔だったが／（ヘンルーダとタイムは青く茂っている）／この悪妻に会って初めて 地獄を見た／（タイムは枯れても ヘンルーダは咲いている）」（拙訳）とうたう。悪魔が人間の悪妻に降参するという滑稽さはまったく同じだが、バーンズの悪魔は幾度も同情を口にする。'The devil he swore by the edge o' his knife' (st. 11, 「ナイフの刃にかけて」) ケリバーンの農夫に同情し, 'The devil he swore by the kirk and the bell' (st. 12, 「教会と鐘にかけて」) 農夫は地獄の生活をしていたのだと悟り, 多少コミカルに, 悪魔らしからぬ感傷性が示唆される。さらに, この作品では各スタンザの2行目と4行目に置かれたリフレインが注目される。「ヘンルーダとタイムは青く茂っている」と「タイムは枯れても ヘンルーダは咲いている」というリフレインは, このストーリー自体には関わりのない, 人間の悲哀を自然の中に包み込んで癒す伝承バラッドのリフレインのような役割に見せている。代表例に「妖精の騎士」("The Elfin Knight" 2G) でのリフレイン 'Parsley, sage, rosemary and thyme' がある。そこで, バーンズのリフレインだが, スコットランド格言 "Rue and thyme grow both in one garden" (ヘンルーダとジャコウソウは両者とも同一の畑に生える) を並べると, バーンズの意図的な技巧が炙りだされる。The Oxford Dictionary of English Proverbs は, この格言の意味を "A persuasion to repent and give over an attempt before it be too late, alluding to the sound of the two herbs here named." と解説している。"rue" はヘンルーダと後悔の意味を持ち, "thyme" はその音から "time" をも連想することから, この格言は「後悔先にたたず」に相当する。バーンズは伝承バラッドのリフレインに見せかけながら, 「後悔先にたたず」を暗示するリフレインを創作して, 悪魔とケリバーンの農夫の哀れさに物語の最初から最後まで教訓を垂れているのである。

ボーダー・バラッドのセクションで紹介したミューアの *Scottish Journey* の続きを読みましょう。ボーダー・バラッドに見るボーダー人のカトリック的な精神と比較すれば「バーンズは極めてプロテスタント的な詩人である。古いフォークソングの焼き直しにおいても, 宗教改革前の感情には戻って行けないでいる。バーンズの猥談, 冒涇, 自由主義, 感傷性は全て, 極めて狭い意味でのプロテスタント的なもののなのだ。」(46) この激しい攻撃的な調子でミューアが比喩として使う「プロテスタント的」という言葉の真意は伝わりにくい。が, 哀れな男たちという滑稽味を帯びた感傷性とリフレインの教訓性を察知した読者は, この作品に, 感傷的に教訓を垂れることを得意としたブロードサイド・バラッド, 例えば "The Babes in the Wood" の流れを容易に見出すだろう。Thomas Millington という無名の文人が1595年ロンドンの書籍出版業組合に登録し (『英国物語詩14選』17), その後18・19世紀を経て現代まで長く人気を誇るこの作品の結末は, 神を畏れて正しく振る舞えという, 勧善懲悪の教訓で結ばれる。

Take you exampmple by this thing,
 And yield to each his right,

Lest God with such like misery
Your wicked minds requite. (157-60)

「このことを戒めとして 後見人たる権利を行使せよ 神が同じ苦しみを与えて あなたがたの邪悪な心に報復することのないように」。感傷性と教訓性は物語に徹する伝承バラッドにはない。ミュアが攻撃したプロテスタント的とはこのような感傷性と教訓性を言うのであれば、バーンズがボーダーの精神を忘れたのではなく、「ケリバーン河畔の農夫」が個人によって創作されるバラッド詩の宿命を端的に示しているからだろう。

5. スコット・ライデン・ホッグとゴシシズム

18 世紀後半から 19 世紀の、スコットと彼の同時代の詩人たちのゴシック・バラッド詩に論を進めよう。スコットには *Reliques* を空腹を忘れて読みふけたという回想記があり（Lockhart 11）、長じてからは、ほんの真似事程度だったと言われるにせよ（*Scottish Literature* 70-71）、自らフィールドワークも行い、Hogg や Leyden などの同時代の寄稿者の協力によって *Minstrelsy* が編まれた。この編纂は *Reliques* のダイレクトな影響と、バラッドの宝庫ボーダー地方で育った生い立ちとが連携した幸福な結果であるが、スコットがバラッドの編纂集を通して熱烈な愛国心を示すことに傾倒した背景には、ゴシシズムのイギリスへの伝播というもう一つの要因も絡んでいる。

スコットは *Minstrelsy* 中のエッセイ “Imitations of the Ancient Ballad” において、1788 年頃からのドイツからイギリスへの新しい文学の伝播に言及し、Gottfried August Bürger (1747-94) 等のドイツロマン派詩人たちがもたらした ‘something like the German taste’ をイギリスで最初に紹介したのは Matthew Gregory Lewis であると述べ（547-51）、ルイスが 1801 年に刊行した *Tales of Wonder* に “The Eve of St John” 等の作品を寄稿してもいた。ルイスとの出会いによってスコットのゴシシズムへの傾倒は拍車をかけられたが、彼のゴシック詩との最初の出会いはジュールガー作 “Lenore” (1773) だった。当時 “Lenore” はイギリス文壇で一世を風靡しており、多くの文人が英訳を試みた。Ehrenpreis が多少の誇張を込めて当時の熱狂ぶりを紹介しているように、Lamb がコールリッジに宛てて「もう『レノーレ』を読んだか？」と書き送ったほどである（Ehrenpreis 67）。スコットは William Taylor という詩人による “Lenore” の英訳 “Ellenore”（出版は 1796 年）が文学愛好家の集まりで朗読されたことを人づてに聞き、その内容に触発されて自らも英訳を試み（Lockhart, *Poetical Works* 606），“William and Helen”（1793）を公にした。この作品のゴシシズムの特色を読み解いてみよう。

ジュールガー原作とスコットの作品を比較した時のスコット作品の特色の一つは、郷土と密着した舞台設定にある。この作品のストーリーはこうである。ウィリアムの戦死の知らせがヘレンの元に届いた後、亡霊となったウィリアムが戻って来た。二人は結婚式を挙げるべく、亡霊たちが踊る怪奇幻想の中を恋の逃避行を果たす。が、行き着いた先はウィリアムの墓場だった。そこで彼は正体を現わし、ヘレンの目の前で骸骨に変身した。物語の中でスコットは、主人公ヘレンが寂しい塔にひとり閉じこもっているという、ジュールガーにはなかった独自の舞台設定

を加えている。

Wild she arraigns the eternal doom,
Upbraids each sacred power,
Till, spent, she sought her silent room,
All in the lonely tower. (85-88)

Then, crash! the heavy drawbridge fell
That o'er the moat was hung;
And, clatter! Clatter! On its boards
The hoof of courser rung. (93-96)

悲しみの極みのヘレンが引きこもる寂しい塔、その周りには濠が巡らされ、吊り橋がガシャンと重々しく降りると、亡霊のウィリアムが蹄の音も高らかに渡ってくる。このささやかながら綿密な描写の意味するところは、実は大きい。スコットは、小説であれ詩であれ、作品の舞台として、少年時代から親しんだ故郷の廃虚や塔とそこに出没する亡霊を巧みに利用するが、それらは彼の郷土への素朴な愛着を示すのみではない。*Minstrelsy* 中の“Introduction”において、「廃虚や塔に出現する亡霊は地域の自然に宿る地霊である」(59)とスコットは解説する。彼にとっての廃虚と亡霊というゴシックテイストは、人間精神が作り出した抽象的な怪奇幻想ではなく、Botting が定義するところの、社会の不安や危機感を過去に投影する一種のカウンター・カルチャー(3)でもなく、郷土という場所のリアリズムの表現なのである。さらに、同じく *Minstrelsy* 中のエッセイ“Imitations of the Ancient Ballad”中の詩論でスコットは、「民衆に語りかけ民衆が楽しむ詩は、民衆が生活する地域に宿る精神(霊)によってこそ活性化される」(536)と言う。スコットのゴシック・バラッド詩“William and Helen”の創作は、時の流行への機敏な反応ではあったが、そのゴシックイズムは郷土への愛着と詩の活性化という目的を持った、スコット独自の愛国心の表現手段と理解される。

スコットと同時代のスコットランドのバラッド詩人たちも多くのゴシック・バラッドを残しているが、そこにスコット流の意味付けは見られるのだろうか。*Minstrelsy* へのバラッド提供者のひとりである John Leyden には“Lord Soulis”(1802-03)というゴシック詩がある。ハーミティジの城を舞台に、魔術師ソーリス卿が妻にしようとさらってきた娘をめぐる、彼女の恋人ブランクスホルムの息子とその一族との対決に破れるストーリーを描いている。伝承バラッド“Sir Patrick Spens”(58)と“The Elfin Knight”(2)、Macbeth 伝説やうた人トマス伝説など、ボーダー地方の伝承バラッドと伝説のモチーフを巧みに組み合わせた奇想天外のストーリーの結末は、突然妖精界から戻ってきたうた人トマスが、持ち帰った魔術書に照らして、鍋にソーリス卿を入れ骨も肉も煮溶かす、というものである。

The black spae-book true Thomas he took;
Again its magic leaves he spread;

And he found that to quell the powerful spell,
The wizard must be boil'd in lead.
.....
They roll'd him up in a sheet of lead,
A sheet of lead for a funeral pall;
They plunged him in the cauldron red,
And melted him, lead, and bones and all. (255-58, 263-66)

スコットランドに伝わるモチーフを自由に料理するという手法はスコット同様の郷土への愛着を滲ませてはいるが、この結末には伝承伝説に取材したモチーフが示すゴシズム以上の、得体の知れない恐怖が感じられるのだ。スコットは、ソーリス卿のモデルは Robert Bruce に反逆して王位を得ようと画策し、1320 年に処刑された William de Soulis であり、アーサー王伝説の影響により、魔術が正しき人に勝つという逸話はスコットランドでも多々あり、歴史の推移にしたがってプロテスタントの敵対者、長老会派の敵対者、イングランド党の扇動者が魔術師占い師とみなされた、と解説する。しかし、スコットランドの民族は、人生の諸事情を善なる霊、悪い霊に振り分けることはあっても、ある人物に魔術師の恐怖 (horror) を負託するというのは驚きである、と述べる。魔術師ソーリス卿とその物語に投影された得体の知れない不気味さ、スコットが率直に 'horror' と指摘した性質は、19 世紀に本格的になるホラー・バラッドの前触れである。

ホラー・バラッドへの傾斜は、ライデンと同様に *Minstrelsy* へのバラッド提供者だった James Hogg の "Sir David Graeme" (1807) にも見い出される。この作品は、死んだ騎士の目を啄む場面を "The Twa Cories" (26 headnote) から、騎士の忠実な猟犬が主人の死を悼む場面を "The Three Ravens" (26) から、娘の駆け落ちを兄弟たちが阻むという筋を "The Douglas Tragedy" ("Earl Brand" [7]) からというように、複数の伝承バラッドのモチーフを自在に取り入れて構成されている。読者は伝承バラッドのモチーフを料理するホッグの力量を堪能するが、目だけではなく舌までも鳥に啄まれたという、伝承を超えたグロテスクさ、物語の結末で語り手が恋人の最期の顛末を述べるモノローグの濃厚なセンチメンタリズムと、内的恐怖と苦悩の描写は、ライデンと同様に、より心理化されたホラー・バラッドへの傾斜を示している。

"They slew my love on the wild Swaird green,
As he was on his way to me;
An' the ravens picked his bonnie bule een,
An' the tongue that was formed for courtesye.

"My brothers they slew my comely knight,
An' his grave is red blood to the brim:
I thought to have splept out the lang, lang night,
But they've wakened me and wakened not him!" (161-68)

この傾向の行き着いた先として、*The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner* (1824) のグロテスクさを思い浮かべることは容易である。

バラッド詩の創作がピークとなる時代の先駆けだったライデンとホッグは、スコットランドの伝承バラッドのモチーフを縦横無尽に使いながらも、スコットが示した新しい流行への興味と、彼独自の郷土愛に引きつけたゴシックイズムとは少しずつ異なる地平へ、より心理化された、本格的なゴシック・バラッドへと向かっていった。

6. デイヴィッドソンの脱スコット

ジョン・デイヴィッドソンはスコティッシュ・ルネサンスを牽引したマクダーミッドがその文化復興運動の先駆者として高く評価した詩人である。デイヴィッドソンの死後初めて刊行された *John Davidson: A Selection of his Poems* (1961) の序文でも、T. S. Eliot が、スコット語ではなく口語体に近い素朴な英語を表現媒体とし、都市で生活に喘ぐ労働者を語り手とした “Thirty Bob a Week” (1894) について、「デイヴィッドソンは彼の時代のイギリス詩特有の言い回しから完全に解放され、詩の内容と用語が完全に一致し、『一週間で三十ボブ』の主人公の店員に威厳をあたえることに成功した」(n. pag.) と、彼の現代詩人としての資質を賞賛した。しかし、スコットランドの Renfrewshire に生まれ育ったデイヴィッドソンの詩作の出発点はバラッドであり、伝承バラッドを模倣した多くのバラッド詩を残している。彼のバラッドへの傾倒の要因の一つには郷土の先人スコットの影響があり、デイヴィッドソンはスコットのバラッド詩を模倣改作したバラッド詩 “Thomas the Rhymer” (1891) を書いた。このバラッド詩においてデイヴィッドソンはどのように郷土の先人の足跡をたどったのかに着目したい。

彼の「うたびとトマス」の冒頭には、スコットの *Tales of Grandfather* (1879) から引用したエピソードが付けられており、作品のソースがスコットの「うたびとトマス」(“Thomas the Rhymer”) 3 部作中の第 2 部であることが明らかにされている。もちろん、スコットの「うたびとトマス」は伝承バラッド「うたびとトマス」を模倣したバラッド詩である。スコットの物語では、妖精の女王が語る 3 つの呪いとして、アレグザンダー三世の落馬死、フロッデンの戦いでのジェイムズ四世の戦死、そしてジェイムズ六世の王室の統合が語られ、郷土とその歴史への愛着とスコティッシュ・アイデンティティの回復が暗示されている。これに対してデイヴィッドソンの模倣詩では、ルイスの “Alonzo the Brave and Fair Imogine” (1795) から、婚礼の席に現れた骸骨というモチーフも借り入れながら、トマスはアレグザンダー三世の落馬死を自然界の変異によって予言する。次の引用は、トマスが王の婚礼から帰る高位の伯爵に、アレグザンダー三世の死を予言する場面である。伯爵は不吉な予言が当たらなかったことをなじりつつも、婚礼の舞踏会の最中に、ピートのような真っ黒な骸骨が忽然と現れた恐怖を語る。トマスは骸骨の出現に先立つ無気味な自然界の変異を伯爵に説く。

Recall, my lord, the weltering horde
Of loathly worms that passed
Northward, and like a filthy sponge

Wiped greenness off as fast

'As west winds wash the snow; that orb

That shook its spear of awe

Beside the brand Orion's hand

Is still in act to draw,

A hideous star — these eyes of mine

Its glare at noonday saw;

'The floods that swamped flocks, fields, and towns,

While men in throngs were slain;

Earthquakes that took the land and shook

The meads beneath the main —

Shells gleamed by drenched flowers, tangle clung

Like snakes about the grain: (57-70)

緑の草地を舐め尽くして北へ向かった芋虫の大群、槍を揺らすかのような不気味な星、大洪水、大地も海底も揺るがす大地震、修道院に落ちた不可解な火。骸骨の出現と天変地異のゴシシズムが伯爵に畏怖とセンセーショナルな感情をかき立てたまさにその時、王の死を知らせる使者が到着する。トマスが予言した嵐とは、アレグザンダー三世の突然死だったのだ。

デイヴィッドソンのトマス物語のもう一つの特徴は、トマスが伝承世界の、妖精の女王から誘惑され、おどおどしながら異界を旅するお人好しの庶民ではなく、孤高のアウトサイダーとして描かれている点である。伯爵の「これが嵐の日だとはな 空にたなびく雲はふかふかしたシルバークレイ 鳥とみまごうこともなく帆船はノルウェーへ」(7-12) という嘲笑に動じることなく、トマスは3回悲しみの高笑いで伯爵を一喝する。「兆候があるのじゃ 日暮れまではわしを嘘つきと呼ばせんぞ」(49-52)。トマスが体現する孤高のヒーローというモチーフはデイヴィッドソンの他のバラッド詩“The Gleeman” (1891) でも繰り返される。曲芸師、香具師、免罪符売りがペニー硬貨の雨を浴びる市場で、人間の虚栄を戒め、その真実をうたう吟遊詩人に与えられたのは、称讃ではなく冷たい無視であった。「詩人はコート襟をたて 喧噪の市場を後にした」(75-76)。初期のバラッド詩から登場する孤高のヒーローは、デイヴィッドソン晩年の一群の *Testaments* に引き継がれてゆく重要なモチーフとなる。

デイヴィッドソンのトマス物語は、スコットのトマス物語をエピグラフとしながらも、スコットランドの恥辱をジェイムズ六世の王室の統合によって漱ごうとしたスコットの模倣とは全く趣を異にするゴシック的な展開であり、スコットの愛国心には与せず、むしろ、それに冷や水を浴びせるかのように、自然の威力と人知の無力のみを強調し、それを知る者の孤独を描く。デイヴィッドソンのスコットの模倣の意図は、スコットが示した手放しの郷土愛ではなく、むしろそれに疑問を呈しているかのようである。

7. 「タム・リンの恋人」と地下水脈としてのバラッド

本稿の結びとして、伝承バラッド“Tam Lin” (39) をモチーフにした、スコットランドの現代詩人・劇作家 Liz Lochhead の“Tam Lin’s Lady” (1984) を紹介する。伝承の「タム・リン」の物語では、異界と人間界の交流とヒロインの一途な愛と冒険がうたわれる。エトリック川とヤロー川が合流するあたりのカーターホーの森に分け入ったジャネットは、そこで青年タム・リンと出会って身ごもった。妖精の国に7年間拐われていたタム・リンは生贄になる直前にジャネットに救出を依頼する。彼岸と此岸が最も接近するハロウィーンの夜、ジャネットは、タム・リンを馬から引きずり下ろし、妖精の魔法がかかって、自分の腕の中で彼がヘビやクマや燃える鉄に変身することに耐え、無事にタム・リンの救出に成功した。ロックヘッドの詩では、舞台はカーターホーの森から街中のカフェへと切り替えられ、語り手は、冒険譚を語り終わって今は黙しているタム・リンの恋人と対座し、彼女が語った物語を復唱して伝承バラッド「タム・リン」を語り直し、同時に、そのモノローグの途中途中で、タム・リンの恋人に一途な愛と冒険の意味と結果をたたみかけてゆく。エピグラフには伝承バラッド第1スタンザ「娘さんたちタム・リンのいるカーターホーへは行かぬように」の忠告が置かれている。禁じるのは、そこへ行くとタムリンと性的関係を結ぶことになるからだ。それに続けてロックヘッドの語り手は「魔法の国で彼と出会ったですって？まあ いいわよ そんな話は私には雲を掴むようにしか聞こえないけどね」と、冒頭からシニカルな調子で、恋愛を現代の目線で吟味してゆく。めくるめく冒険の後にタム・リンと恋人は結婚し、めでたしめでたしで終わるのは「これまでだったらそれでよかったのよね」(‘conventionally right’ 64) と。モノローグの最後はこう結ばれる。

So we're all supposed to be happy?
but how about you, my fallen fair maiden?
now the drama's over, tell me
how goes the glamourie?
After the twelve casks of good claret wine
and the twelve and twelve of muscadine,
tell me
what about you?
How do you think Tam Lin will take
all the changes you go through? (68-77)

話は聞いた。「それで、皆が幸せってこと あなたはどんなの 芝居は終り、魔法はどうなるの クラレットワインを12樽、ムスカデワインを24樽飲んだ後で、あなたはどんなのよ タムリンはあなたがいくぐったあの変身を耐えてくれるのかな」。

過剰な解釈はこのシンボリックな作品を狭めるかもしれない。ロックヘッドは「タム・リン」のみならず、それに類する、森で恋人に出会うバラッド“Gil Brenton” (5) にうたわれる豪華な花嫁支度「ムスカデワインが12の2倍」という下りもさりげなく取り入れるほどに、伝承世界

に親しんでいる。伝承バラッドは、ある時ある場所にふと湧き出してその存在を示す地下水脈のように、現代詩人にも流れている。

8. 結び

スコットランドにおいてバラッドという物語詩が、口承伝承の時代から現在まで、スコティッシュ・アイデンティティの創出、表明、批判と再創造が展開された文化事象であることを、7つのトピックで時系列にたどった。1707年議会合同によるスコティッシュ・アイデンティティ喪失の時代には、バラッドやソングのコレクションがナショナル・アイデンティティ表明の役割を果たしたが、その後のバラッド文化の展開は、物語を当初のままに、形と意味を変えずに厳重保存することではなかった。ミューはボーダー・バラッドの精神をスコットランド文学の本質とまで言い切り、感傷性と教訓性を帯びたパーンズのバラッド詩を批判したが、他方、ボーダーの著名人トマスのモチーフは幾人もの詩人たちが自らのテーマに従って模倣し改作し、トマス像は多様化した。スコットの時代、彼のゴシック・バラッドは愛国心の表明だったが、スコットのバラッドサークルの詩人たちライデンとホッグは、ナショナル・アイデンティティ探究とは異なるゴシシズムを表現し始めた。さらに、デイヴィッドソンはスコットの模倣詩の創作によって、脱スコットの態度をより明白にした。カーターホーの森でタム・リンと恋に落ちたジャネットは現代詩人ロックヘッドにその恋の意味を問われている。スコットランドのバラッドは、その時々の詩人たちによって、変質され、批判され、多様化されて、相対化に晒されることで継承されてきた。

参考文献

- Anderson, Benedict. *Imagined Communities*. 1983. London: Verso, 2006. Print.
- Botting, Fred. "In Gothic Darkly: Heterotopia, History, Culture." Ed. David Punter. *A Companion to the Gothic*. Blackwell, 2000. Print.
- Brooks, Cleanth, ed. *The Percy Letters: The Correspondence of Thomas Percy and William Shenstone*. Yale UP, 1977. Print.
- Child, F. J. ed. *The English and Scottish Popular Ballads*. 5 vols. 1965. New York: Dover, 2003. Print.
- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707-1837*. 1992. Yale UP, 2014. Print.
- Ehrenpreis, Anne Henry. *The Literary Ballad*. London: Edward Arnold, 1966. Print.
- Farrell, Maureen. "The Ballads of Tam Lin and Thomas the Rhymer: transformations and transcriptions." Poetry and Childhood Conference. British Library, 2009. Print.
- Friedman, A. B. *Ballad Revival: Studies in the Influence of Popular on Sophisticated Poetry*. U of Chicago P, 1961. Print.
- Gifford, Douglas, Sarah Dunnigan, and Alan MacGillivray, eds. *Scottish Literature: In English and Scots*. Edinburgh UP, 2002. Print.
- Gilfillan, George, ed. *The Poetical Works of Robert Burns*. Vol. 1. Edinburgh: James Nichol, 1856. Print.
- Groom, Nick. "'The purest english': Ballads and the English Literary Dialect". *The Eighteenth Century: Theory and Interpretation*. 47.2-3 (2006): 179-202. Print.
- Herd, David, ed. *Ancient and Modern Scottish Songs, Heroic Ballads, Etc.* 2 vols. 1776. Farmington Hills, MI:

- Gale ECCO, 2010. Print.
- Hogg, James. *The Works of the Ettrick Shepherd, with a Memoir of the Author by the Rev. Thomas Thomson*. London, 1876. Print.
- Johnson, James, ed. *The Scots Musical Museum: Consisting of Six Hundred Scots Songs, with Proper Bases for the Piano Forte. Humbly Dedicated to the Catch Club Instituted at Einr. June 1771*. 6 vols. Edinburgh, 1787-1803. Web. 22 Oct. 2021.
- Kinsley, James, ed. *Burns Poems and Songs*. 1969. Oxford, 1988. Print.
- Kushner, Ellen. *Thomas the Rhymer*. 1990. New York: Bantam, 2004. Print.
- Leyden, John. *Poems and Ballads, with a Memoir of the Author by Sir Walter Scott, and Supplement by Robert White*. Kelso, 1858. Print.
- Lewis, M. G. *Tales of Wonder*. Vol. 1. London, 1801. Print.
- Lindsay, Maurice, ed. *John Davidson: A Selection of his Poems*. London: Hutchinson, 1961. Print.
- Lockhart, J. G., ed. *The Poetical Works of Sir Walter Scott, Bart*. Edinburgh: Robert Cadell, 1841. Print.
- Lockhart, J. G. *The Life of Sir Walter Scott, Bart. 1771-1832*. London: Adam and Charles Black, 1896. Print.
- Lyle, E. B. "The Relationship between Thomas the Rhymer and Thomas of Erceldoune". *Leeds Studies in English*. 4 (1970), 23-30. Print.
- Muir, Edwin. *Scottish Journey*. Edinburgh: Mainstream, 1935. Print.
- Murray, Kylie. "Rhyme (r) and Reason: Thomas of Erceldoune, Prophecy and Anglo-Scottish Identity". "What Country's This? And Whither Are We Gone?". Ed. J. Derrick McClure, Karoline Szatek-Tudor, and Rosa E. Penna. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars, 2010: 320-35. Print.
- Percy, Thomas, ed. *Reliques of Ancient English Poetry, Consisting of Old Heroic Ballads, Songs, and Other Pieces of Our Earlier Poets, Together with Some Few of Later Date*. 3 vols. 1765. Ed. Henry B. Wheatley, New York: Dover, 1966. Print.
- Ramsay, Allan, ed. *The Ever Green: A Collection of Scots Poems Wrote by the Ingenious Before 1600*. Vol. 1. 1874. Charleston, SC: BiblioLife, 2009. Print. Vol. 2. 1876. Charleston, SC: Nabu, 2010. Print.
- , ed. *The Tea-Table Miscellany: A Collection of Choice Songs, Scots and English*. 2 vols. 1775. Gale ECCO, 2010. Print.
- Reed, James. *The Border Ballads*. U of London. 1973. Print.
- Scott, Walter, ed. *Minstrelsy of the Scottish Border*. 1802-03. Ed. Thomas Henderson. London: George G. Harrap, 1931. Print.
- . *Tales of a Grandfather: History of Scotland*. Vol. 1. Boston: Ticknor and Fields, 1861. Web. 28 Oct. 2021.
- School of Scottish Studies, The. *The Muckle Sangs: Classic Scots Ballads* (Scottish Tradition 5). 1975. Greentrax: 1992. CD.
- Shepard, Leslie. *The Broadside Ballad: A Study in Origins and Meaning*. 1962. PA; Legacy, 1978. Print.
- Shuldham-Shaw, Patrick, et al., eds. *The Greig-Duncan Folk Song Collection*. 8 vols. Emily B. Lyle, gen. ed. Aberdeen UP, 1981-90 (vol. 1-4). Edinburgh: Mercat, 1995-2002 (vol. 5-8). Print.
- Snyder, Franklyn Bliss. "Note on Burns and the Popular Ballads". *The Journal of English and Germanic Philology*. 17.2 (1918): 281-288. Print.
- Turnbull, Andrew, ed. *The Poems of John Davidson*. 2vols. Edinburgh: Scottish Academic P, 1973. Print.
- Watson, James, ed. *A Choice Collection of Comic and Serious Poems both Ancient and Modern. By Several Hand*. 1706-11. Farmington Hills, MI: Gale ECCO, 2010. Print.
- Watson, Roderick, ed. *The Poetry of Scotland: Gaelic, Scots and English*. Edinburgh UP, 1995. Print.

スコットランドにおけるバラッド文化の展開（中島）

中島久代・山中光義・薮下卓郎監修．『全訳 チャイルド・バラッド』全3巻．音羽書房鶴見書店，2005-06. Print.

中島久代・宮原牧子・山中光義編著．『英国物語詩 14 撰：伝承バラッドからオーデンまで』．松柏社，1998. Print.

